

中国語辞典『四声標註支那官話字典』の考察

王 雪

『四声標註支那官話字典』は西島良爾と牧相愛の編によって、1902年に出版された日中辞典である。筆者の調べたところ、『四声標註支那官話字典』は近代日本における日本人編纂の最初の日中辞典である。おまけに、日本の中国語教育は1876年に南京官話から北京官話に転換したので、この辞典は日本の初めての北京官話辞典である。

『四声標註支那官話字典』は字典と冠されているが、形式は整然としておらず、内容も洗練されておらず、誤りなどが多い。筆者はこの辞典を多角的に検討した結果、この辞典は実際には中日辞典の性質を持つという結論を得ることに至った。つまり、『四声標註支那官話字典』は中国語を翻訳した日本語を見出しにし、中国語を訳語にするという編纂方法をとっている。このように取り扱っていた理由は、最初の中国語辞典として参考とする資料がなかったこと、および「中日辞典」より「日中辞典」を作りあげることには固執していたことなどが挙げられる。『四声標註支那官話字典』の見出し語句には貿易と軍事は稀で、生活に密着している言葉が非常に豊富で、しかも表現は官話より俗語のほうが多い。波多野太郎(1984)は「本書は北京土白やクラシックな口語をよく収録した辞典である点、異色である。¹」と指摘している。

そこで、本論ではこのあまり知られていない『四声標註支那官話字典』を、近代日本における最初の日中辞典であるという立場に立って、その編纂方法について筆者の提案する観点を論証する。次に、辞典に収録されている語彙の範囲、清末の北京土語、俗語の実態と意味を探り、北京語資料としての価値を明らかにするのを目的である。

1 『四声標註支那官話字典』の編纂

『四声標註支那官話字典』(以下『四声』と略)は、縦19cmの日中辞典である。編者は西島良爾と牧相愛である。西島良爾は1870年静岡の生まれ、1890年静岡県選抜生として上海の日清貿易研究所に入学し、中国語を学び始めた。1894年8月に日清戦争が勃発し、研究所の卒業生89名中72名、職員7名が陸軍通訳または軍人探偵として従軍した。西島もその1人で、陸軍通訳になり、後年その体験を「従軍漫録」と題して著した。戦後は台湾総督府に勤務した。1899年から1904年まで大阪控訴院及び大阪地方裁判所の中国語通訳官として勤務する傍ら、大阪で中国語教育に努めた。1904年、日露戦争が始まると、西島は再び召集されて軍旅に従った。

¹ 波多野太郎編・解題『中国語学資料叢刊：白話研究篇』不二出版、1984年。

1905年に帰国した後、神戸に移った。

後半生の大部分を過ごした神戸において、1917年に設立された神戸日支実業協会の職員となり、5年の後に創刊した機関誌『日華実業』の編纂主幹を担当した。西島は1923年に肝硬変のため53歳で急逝した。西島は教科書、時文・尺牘、会話、字典、中国事情など多種多様な中国語学習書を著した。それらは版を重ね、その出版は西島の没後も続けられた。牧相愛の生涯についてまだよくわかっていないが、西島の上海の日清貿易研究所の同級生で中国語を習得し、卒業後は従軍したこともある。彼には『燕語啓蒙』(1899.10)という著作がある。『四声』の巻頭には近衛篤磨の題字「千里咫尺」と当時の中国の領事・蔡燾による1902年端午の節句の3日後に書かれた序がある。

『四声』は、現在は公共図書館に所蔵されているのみで、あまり世に知られていない。また、『中国語学資料叢刊：白話研究篇』にも収録されており、そこに出版年を記していないが、波多野太郎の解題と序文をみると、1902年に出版されたのは確かである。

『四声』は辞典と補遺との2部分から構成され、4,454語を収録している。本文の前に序文と簡単な索引がある。辞典部分には3,289語があり、親字には会話文も入り、見出しの仮名数は、最小が2字、最多が27字である。補遺部分は1,165語で、すべて単語で、字数は5字が最多である。見出しは「いろは順」に排列され、上段は日本語、中段は中国語、下段は中国語の仮名表音で対応する縦書きになっており、1ページを上下2段組にわけてある。一部分の日本語仮名(お、そ、え)は変体かなで書かれているが、偶々「ゑ」も見られる。

『四声』は中国語の発音を仮名で注音したのである。仮名式に伴う四声の表し方は、左下から、左上、右上、右下の四隅に○を附すのを採用されている。有気音の場合は○を黒くさせる。このような表記方法は当時日本では一般的である。

『四声』は基本的な北京語が網羅的に編まれているが、出处資料が使われていたかどうかは不明である。凡例から、本書は編者が「各其公餘の暇を以て従事せる講席に於ける教案中より其日常最も普通に使用せるものを蒐集して」なったものであるとわかる。しかし、西島が『四声』より先に出版した何冊かの教科書をみると、互いには重複した内容が多くある。『四声』もこれらの教科書を踏襲しているのではないかと思い、筆者は辞典の語彙をそれらの教科書と付き合わせてみた。結果的に大部分の文は教科書には出現しておらず、単語に同義語はあるが、言い方など少し違いがあるため、『四声』は教科書を踏襲していないと判断した。

『四声』の編纂に関しては、内容を避けて論じ得ない特異性がある。なぜなら、その見出しと解釈との関係は、普通の日本語から中国語へ翻訳する日中辞典と異なり、解釈の中国語から日本語へ翻訳したものを見出しとしているからである。『四声』はこのような過程を経てできあがったことを論証してみよう。

まず、多くの中国特有の事物が見出しとして用いられている。その例を下で示す。以下の例は原文の変体仮名を使わず一般的な仮名にする。

種類	見出し	解釈
書名	あんないき	官商快覽 ²
	くわいわ	話條子 (語言) ³
官名	けいさつじむをゆうするもの	地面章京 ⁴
	さんりよう (参領)	甲喇章京
諺	おどろかざるのこころ	為人不作虧心事半夜敲門心不驚
	へつらう	趕着他走動的 (低三下四的) (巴結) (哈巴狗兒掀簾子嘴兒挑着)
	じぶんのことをしてひとをかまうな	你管你的罷不用管人家的事 (各掃自己門前雪休管他人瓦上霜)

次に、中国特有の節気、料理なども収録されている。一般的に、日中辞典は、日本にある事物を優先的に見出しとするが、『四声』はそれに反して、日本の事物はあまり見られず、中国特有の事物が多い。同時期の他の日中辞典と比較するとそれは明白である。下に、1905年に出版された『日漢字彙』⁵を例とし、両辞典のイ部の仮名数5字の一部語彙を比較してみる。

『四声』1902		『日漢字彙』1905
いけすうお	坑魚	いうちやう「優長」(名)優優
いひかたぬ	説不過	いかがはし「如何」(形動)靠不住
いふものの	雖然	いたらがひ「伊多良貝」江瑤柱
いてんした	搬家了(挪到了)	いぢきたな「意地穢」(形名)貪心
いりません	用不着	いちじゆく「無花果」(名)無花果
いろつけに	紅嫩的	いちじるし「著」(形動)顯然
いもとむこ	妹夫兒	いときりば「絲切齒」(名)狗牙
いかにせん	奈因(無可奈何)	いひあてる「言當」(動)説對了
いつしよに	一併(一塊兒)	いひあはず「言合」(動)商量

² 馮筱才『晚清変局中の官僚与商人』東方歴史評論(2014年6月2日)により、『官商快覽』は中国清朝後期の図書である。

³ 常瀛生『封面満文書影——「話条子」(咸丰年手抄本)』(『満族研究』1992年)により、『話条子』は清朝の満語教育において使用された会話書である。

⁴ 「章京」は中国清朝の官名である。清代早期において武官の称呼であったが、それ以後は武官に限らず使用されていた。

⁵ 石山福治『日漢字彙』南江堂、1905年。

このように、『日漢字彙』の見出しは純粹な単語で、日本語辞典の基本語彙といえるものである。それに対して、『四声』の見出しは単語のみならず、「いてんした」のような文もある。また、「坑魚、説不過、紅燉的、妹夫兒」のような中国特有の事物または方言が多数収録されている。

また、『四声』の見出しとなった日本語語句とそれに対応する中国語の解釈との間には合致しない点が目立つことから、訳し方に問題があると思える。例をあげて説明する。

① うんどう — 溜

「うんどう」を漢字の「運動」と翻訳することは日本人にとって容易なことで、『日漢字彙』にも見られるが、ここでは「溜」と間違えている。「溜」は「抜け出す」という意味で、翻訳者は正確な意味を把握せず、運動の一種と誤解し、「うんどう」と訳したのであろう。

② はじめる — 動手

「はじめる」を「開始」と翻訳するのは一般的で、『日漢字彙』では「開、起」と解釈している。「動手」は動詞で「人を打つ」、「手で触る」など複数の意味を持ち、「自分の力でやってみる」という意味もある。「動手」は「はじめる」の意味ももっているが、翻訳者は「動手」の本来の意味を凝縮して、「はじめる」の訳だけをとっている。

③ おおきい — 慙

「おおきい」は一見して、「大」と訳するのが普通だが、「慙」は「愚かな」の意味を持っており、愚かしい人はふてぶてしく、態度がおおきいので、「おおきい」と誤訳したのであろうか。

④ 暴食 — 大塊的吃肉

「暴食」は「無闇やたらとたくさん食べること」で、中国語に翻訳すると「暴食」でも通じる。「大塊的吃肉」は「肉を大きく切って食べる」ことで、肉を次々と口に放り込み、よく噛まずに食べる様子から「暴食」と訳したのではないだろうか。

⑤ くちにみつありはらにけんあり — 上頭説話脚底下使絆子

「くちにみつありはらにけんあり」は信用できない人のたとえである。諺としては日本語にも中国語にもある。翻訳すると、直訳して「口蜜腹剣」となるのが一般的である。「上頭説話脚底下使絆子」は中国では口語的な諺で、「国学宝典」⁶のデータベースを検索した結果、文学作

⁶ 『中国学術期刊』電子雑誌社有限公司による。中国先秦から民国にかけて2000年余の漢字による典籍、及び清代から現代まで学者たちの古籍について研究成果を、計4903点を収録している。経史

品には『紅樓夢』のみに見られる。編者は『紅樓夢』または他の資料を手にし、「上頭説話脚底下使絆子」をみて、同じ意味の「くちにみつありはらにけんあり」へ翻訳したと推測される。

著者の中国語のレベルが低ければ、日本語から中国語への翻訳に間違いがあることは理解できるが、上にあげたような例は非常に多く、その解釈は常理に反している程である。

一方、同時期の他の日本人による正確な解釈もあり、例えば『日華語学辞林』(1907)⁷では「拔一抜く」「愍一太イ。愚ナル」と訳している。西島良爾と牧相愛にこの正確さが欠けているのは不思議であるが、それは編纂方法と関わっており、つまり著者が訳としての正確さに配慮しない日本語の語句を見出しとする。

ところで、『四声』が中国語を訳した日本語を見出しとした理由は、日本人にとって、見出しが日本語であれば調べやすいと思われる。しかし、この編纂方法によって、『四声』は辞典としての機能が低下することになった。『四声』より後に出たほか他の日中辞典を通覧したところ、『四声』の編纂方法を引き継いだものは無かった。

以上のように、参考できる日本語から外国語を検索する辞書というのは全くなかったが、『四声』より先行する教科書の日本語と中国語の対訳が参考することができると思われるような背景の下に、『四声』の編纂方法の考察を通して、近代日本における最初の中国語辞典の編纂は、中国語を翻訳しただけで日本語の修正に配慮しない語句を見出しとする段階に止まったと結論付けられる。

2 『四声標註支那官話字典』の北京俗語

『四声』はどのような意図を持って、語彙を選択したのであろうか。収録されている中国語の分野をみると、天文・地理、職業の呼称、食事・衣類、植物・動物など広い領域にわたっている。最も多いのは日常生活用の語句で、次は商業用語であり、軍事語や法律語は僅かである。一見、言葉に対する選別や練上げが全くなさそうに見えるが、実は日本人が中国のあらゆることに関心を持っていたことを反映していることは明らかである。とりわけ、社会生活を色濃く反映する職業の単語は豊富で、全部で56語ある。そのうち、対応する中国語の対訳は、違う言い方を()で付け加えている。

いしや 醫生	いえぬし 本家兒 (房東)
とりて 馬快	とくい 主顧 (主戸)
かたり 拐子 (騙淨) (騙子手)	かりうど 獵戸
かゆをうるもの 賣粥的	たんてい 馬快
けび (婢) 丫頭	こじき花子 (老花子)
てんごく 牢頭子 (獄長)	てだすけ 幫手

子集、通俗小説と叢書を含む。

⁷ 井上翠『日華語学辞林』博文館、1906年。

でんれいし 命官	ぎようじ 判人
きんまんか (普通) 財主 (便家)	きんまんか (尊稱) 員外 (潤兒人)
めしつかいにん 使喚人 (當跟人) (跟班的) (底下人) (打雜兒的)	
みちあんない 帶道的 (引路的) (帶路的)	じぬし 地主兒
しゆじん 上頭 (東家)	しくわん 司官
ひようがしら (年期奉公) 長工	はかせ 博士
はしため 鬘 (底下人)	へい 兵丁
ぬひはくし 繡花匠	るすばん 看家的
わかだんな 少爺 (小君)	かたい 乞丐 (花子) (要飯的)
かねもち 財主	がくしや 念書人 (斯文人)
かみゆい 剃頭的	かみそり 剃頭的
そばめ 妾 (鬘)	なかだち 媒人
うば 奶媽子	うけにん 保人
のうふ 農夫 (莊稼的)	くりや 廚子
くるまや 車夫	くわうてい 皇上 (萬歲爺)
くわうごう 皇后	やもを 騾夫
ごうし 郷紳	てだい 夥計
あうびめ 嫖子	さくわん 泥匠
きんしゆ 財東	もんじん 門生
せしゆ 施主	よせせきのうたいめ 唱書的 (彈唱的)
かじや 鐵匠	やくしや 唱戲的
なかだち 媒婆子	むしよくぎようのひと 閒丁兒
なかがい 經紀 (經手)	

上記の中では、文語は「醫生」、「媒人」など数個しかないが、口語は「馬快、媒婆子」など多く収録されている。「めしつかいにん 使喚人 (當跟人) (跟班的) (底下人) (打雜兒的)」のように、同じ職業の異なる呼称を登載したものもある。階級社会において、言語は階級性など社会的色彩を帯びている。「財主」、「車夫」、「唱書的」、「騾夫」のような多くの職業はすでに、または殆ど消失してしまったのである。これらの職業語は、現在では使用されていないのに、中国清末における大多数の下層民が生計を立てるために肉体労働に従事していた社会の実情を反映している。

会話語では、一番多いのは「いふばかりでじつがない 白説靠不住的」「ばかのきよく 搬着屁股作嘴不知香臭」のような口喧嘩でよく使われる言葉、次に多いのは「おおかねをもうけた 發了大財了」、「おどつてやねにのぼる 躡一聲上了房」のような日常会話や行為の言葉である。

また、30程の慣用語が載せられている。それらは当時もっとも流行っていた慣用語であろうと推測し、「国学宝典」と『中華俗語源流大辞典』⁸を参考に調べてみた。以下の10例を挙げ、括弧内には「国学宝典」にあげられた書物の数と「国学宝典」或は『中華俗語源流大辞典』から記載書名の1つを記載する。

- ① 君子一言快馬一鞭 いふたこと⁹はけつしてちがはぬよ (4、明代『金瓶梅詞話』)
- ② 一客不煩二主 いちじかならずにゝんをもとめず (27、明代『水滸伝』)
- ③ 沒有不透氣的牆 かべにみみあり (なし)
- ④ 先小人後君子 りをさきにしてぎをあとにす (7、明代『西遊記』)
- ⑤ 無風三尺土有雨一街泥 ほこりがひどくみちがわるい (1、清代『文明小史』)
- ⑥ 一方水土一方人 とちになれてゐる (2、清代『郷言解頤』)
- ⑦ 八九不離十兒 ちがいががない (なし)
- ⑧ 上頭説話脚底下使絆子 くちにみつありはらにけんあり (1、清代『紅樓夢』)
- ⑨ 前不着村後不着店兒 みうごきができぬ (8、明代『金瓶梅詞話』)
- ⑩ 耳聞不如目睹 みるはきくにまさる (3、宋代『資治通鑑』)

上記の例のように、ほとんどの慣用語は社会生活と関わったもので、明清以前の小説に使用されており、当時流行っていた慣用語であると断定してよいであろう。⑦と同じ言い方はないが、同じ意味の「十不離九」は「国学宝典」で2回出現している。また、⑤のような北京特有の慣用語といわれる¹⁰もあるので、北京の生活と密着したものを収録したと思われる。

このように、『四声』は庶民の生活用語に重点を置いていることがわかる。『四声』を通して日本人は中国人の庶民生活を理解することができたであろう。

ここでは、北京土語について更に詳しく考察するために、同時代の北京語の語彙と会話句を大量に収録している『日華語学辞林』(井上翠・以下『日華』と略称)を対照しながら、「国学宝典」のデータベース、現代の『北京土語辞典』(徐世榮 1990)、『北京方言詞典』(陳剛 1985)『北京話詞典』(高艾軍・傅民 2013)、『漢語大詞典』(漢語大辞典出版社 1986)、日本で最大規模の国語辞典『日本国語大辞典』第二版を参考にして検討する。

『四声』に登載されている北京語には、現在通用している北京語と異なり、旧時代に北京の人が使用し、現代では年配の北京市民のみに理解できる言葉が多数見られる。

⁸ 李亞虹『中華俗語源流大辞典』中国工人出版社、1992年。

⁹ 原文では「こと」が平仮名の合字になっているが、印刷の都合上二字で表記する。

¹⁰ 『文明小史』(清の小説)で、「原来前人有两句即事诗，是专咏京城里的风景的，叫做：“无风三尺土，有雨一街泥。”(古人により北京の町を形容する詩が2文あり、すなわち「无风三尺土，有雨一街泥。」である。筆者翻訳)がある。

まず、『四声』にあり、かつ、現在の北京語辞典にも見られるものを一部挙げてみよう。

ほやけ 記臉子	もおけぐち 得項
ちいをえたる 得項	おしきことには 可惜了兒的
ろじく 打野盤兒	としご 埃肩兒
ととなふ 齊截了	くれあいのじぶんに 挨晚兒的時候兒
くびいつぱいのあせ 肆脖子汗流 ¹¹	やちんぐらし 喫租子 (喫瓦片兒)
まるぬれ (雨ニ) 精濕了	ざんげんのためにしす 舌頭底下壓死人
さげて 提溜着	あらぬい 粗針大麻線の

これらの語彙は北京語辞典にもあることにより、当時確実に存在した北京語であると確認した。

次に、現代の北京語辞典には収録されていない語彙も多々あるので、それらの内のいくつかを挙げる。

おにかわら 貓頭兒瓦	ちうぐらい 中中兒
ちのえき 血津兒	ちやうばのくるま 站口兒車
ぼんやりと 胡哩嗎哩的	ちいさきあやまり 錯縫子
おつや 座夜	きんまんかのしてい 胎裏紅
いば 爐上	なると 一放
とうげをこす 過梁	うへきし 把師
しんせいほんば 到邦到地	いづれもよかつた 兩可着了
いけどり 活拿着	うしろむきになりて 轉過春梁來
じをかりてをんをとる 借字抄音	はるのすえになつた 春景兒完上來了
やんだ (雨が) 住上來了	とおびてあたためる 篩熱
ときかたがしんせつ (書物) 解得很切	花細工人 花作
くらしかたがおおきい 嚼用大	ていとうになす 做為典
こくじはんのしゅりょう 把滋事頭兒	
ふくめんをかぶりたるもの 勾上臉的	

これらの語彙を詳しくみていくと、以下のことが分かる。

¹¹ 『北京土語辞典』では「四脖子汗流」と書かれている。

- ・ 始めの8つ(「貓頭兒瓦」、「中中儿」、「血津儿」、「站口儿車」、「胡哩嗎哩的」、「錯縫子」、「座夜」、「胎裏紅」)は『日華』にも載っているが、「座夜」は『日華』で「坐夜」と変えられている。
- ・ 「爐上、一放、到邦到地」は『四声』にしか見出されない。しかし、中国語でも日本語でも一体どういう意味であろうか、不明である。
- ・ 「過梁」は恨みなどが消え去ったことである。「兩可着了」の意味は「どっちもよい」であろうと推定できるが、この2つの言い方は『四声』しか見られない。
- ・ 「活拿着」の意味は「捕まる」である。類似する言い方の「活拏住」は『日華』に見られる。
- ・ 「把師」については検出していないが、「植木師」は植木の栽培や庭づくりを職業とする人の意味から、「把師」が「把式・把勢(有某种专门技术的人)」¹²(専門的)の誤字の可能性も考えられる。『日華』には「把勢 力業。山ヲハル。」とある。
- ・ 「借字抄音」は、天津方言の成語として『天津市地方志網』¹³に収録されている。
- ・ 「完上來了」の意味は「終りそう」であるが、現在の北京語辞書にもない。「国学宝典」によると、清代の『兒女英雄伝』の第三十九回に「飲了一巡，安老爺看了看台上的楚漢争鋒是唱得完上來了……。一時酒闌人散，乐止礼成。」がある。
- ・ 「雨住了」は「国学宝典」によると10点の書物に見られるが、「(雨) 住上來了」はない。
- ・ 「篩熱」は酒を暖めるという意味であろう。「国学宝典」によれば、5点の書物にある。明代の『金瓶梅詞話』には全部で7回ある。
- ・ 「很切」という言い方は、清代の『品花宝鑑』の第24回に「這考語出得很切，足見蕊香近日識見又長了好些」など2か所に出ている。
- ・ 「細工」は、手先を使って細かい器物などを作ること。また、それを作る職人、細工師である。「花作」は調べたが、見当たらない。日本語の「花作り」は、花の咲く草木を栽培すること。また、それを業とする人で、日本語を中国語に混用、誤用した可能性もあるかと思われる。
- ・ 「嚼用大」は、『紅樓夢』に「好大的嚼用呢」、「添出許多嚼用」がある。
- ・ 「做為典」は検出できなかったが、日本語の「ていとうになす」から、「抵当」を意味すると判断できる。
- ・ 「把滋事頭兒」の言い方も検出できなかったが、『日華』に「滋事」があり、「事面倒ニスル」と解釈している。「頭兒」は一般的にリーダー、先導者、代表人など高い位に立つ人を指すが、「把」は前置詞になると「把+名詞+動詞」の句型で「〇〇をやらせる」という意味を

¹² 高艾軍・傅民『北京話詞典』上海：中華書局、2013年、18頁。

¹³ <http://www.tjdfz.org.cn/tjtz/msz/di9pian/3zhang/3/index.shtml>

表すため、「滋事頭兒」の後ろに動詞が必要だが、この文にはない。日本語の「こくじはんのしゅりょう」と中国語が結びつかないため、その意味もよくわからない。

- ・「勾上臉的」は「ふくめんをかぶりたるもの」となっているが、中国の伝統芸能である京劇における顔にくまどりをすることである。

以上で検討した北京俗語は、前述した5点の中国語辞典とデータベースには収録されておらず、筆者が『四声』を詳しく調べたことによって、その存在が明らかとなった語句である。清末の頃に流行した北京語の中には、現代まで伝わってこなかったものも数多くあるはずであり、その実態の一端が今回の研究で明らかとなった。これにより、北京俗語に新たな語句が加えることができることになり、今後の北京俗語の研究に大いに役立つであろうことを確信する。『四声』を北京俗語の貴重な資料であるとの位置づけを高める一方、日本人の学習していた北京官話は「官話」だけではなく、俗語も多い事実を掘り起こした。

3 『四声標註支那官話字典』の誤訳

『四声』が中日翻訳書である事実を踏まえて、中国語から日本語への翻訳を検討してみよう。既に3.2.1において、その誤訳の一部を見てきた。

以下に、『四声』に見られる誤訳の例を、その原文の日本語から中国語への順序を入れ替えて提示し、明治期の他の中国語辞典を参照し、誤訳の理由を分析してみる。

① 饅頭 — うどん

中国語の饅頭は「ワンタン」である。日本語の「うどん」は小麦粉に少量の塩と水を加えてこね、薄く伸ばして細かく切ったもので、茹でて汁と共に煮たりして食べるもの。「うどん」または「きりむぎ」とも呼ぶ。ワンタンとうどんは全くの別物である。「うどん」の語源は漢語のウンドンの約¹⁴が、『日漢字彙』(1905)には「うどん「饅頭」(名)麪。」もあるので、当時の「うどん」は麪であることがわかる。なぜ『日漢字彙』が正しく『四声』が間違っているといえるのかというと、『四声』の訳は日本語と中国語の混用に起因していると考えられるからである。

② 拔 — うごかす

「拔」は「引き抜く」の意味で、「うごかす(物を他の位置に移す)」動作の一種であるが、「動かす」と対訳するのは間違っている。つまり、ある場合で、『四声』はある中国語の語義を拡大、一般化して、日中対訳の見出し語にしてしまった。

¹⁴ 『日本国語大辞典』第2巻、376頁。

③ 站住 — すわり

「站住」は「立ち止まる」であるが、「すわり」は「坐」である。

④ 一不成二不休 — やぶれかぶれ

「一不成二不休」とは、やり出したからには手を引かない、乗りかかった船との意味で、日本語の諺である「やぶれかぶれ」は自棄になることや自暴自棄なさまを表し、「一不成二不休」とは合致しない。

⑤ 先小人後君子 — りをさきにしてぎをあとにす

「先小人後君子」は、「後でいざこざのないように前以て目先の利害（金などの）話をはっきりつけておく。」、相手との関係を重んずるための人間交際術といえる。「利を先にして義を後にす」は「利益の追求を先にして、正しい人の道を後にする。」で、マイナスの意味の諺である。このように、「先小人後君子」と「利を先にして義を後にす」とは同じ意味ではない。

⑥ 前不着村後不着店兒 — みうごきができぬ

「前不着村後不着店兒」は旅に行き暮れて泊まる宿屋もない、頼るべきものもなく進退窮まることを指し、具合の悪いことに喩える時もある。「みうごきができぬ」では、本来の意味を表すことができない。

⑦ 嫉賢妒能誤國害民 — かんゆう（奸雄）

「嫉賢妒能誤國害民」とは、賢い人を恨むことは、国家と人民の安泰を脅かすということであるが、「かんゆう」は悪知恵入を働かせて英雄となった人である。中国語と日本語が合致していない。

⑧ 白刀子進去紅刀子出來（進退兩難） — のっぴきならぬ

「白刀子進去紅刀子出來」は人を殺した後ナイフが赤くなった、を意味する。「進退兩難」とは進むことも引き返すことも出来ないことで、両語の意味が異なる。「のっぴきならぬ」とはどうにもならないことで、「進退兩難」となるはずである。従って、編者の「白刀子進去紅刀子出來」の理解は正確ではない。『日華語学辞林』には収録されているが、日本語訳が付いていない。

『四声』には、単語の翻訳に関して、名詞より動詞のほうに誤訳が多い。「饅飽」の誤訳は中国語に対して、日本語の要素を与えたため発生したのであろう。動詞が日本人にとって困難であり、多義語を単一の意味にしか分からないようなことは誤訳をもたらしている。

慣用語や諺の翻訳については、中日に同じものも多いが、慣用語の翻訳方法は、日本語の諺を借りるほか、「しゅうとめがやかましくてもよめはだまつてこらゆる 婆婆嘴碎媳婦耳聾」「いちじかならずににんをもとめず 一客不煩二主」のような直訳、及び「いさかい 碟兒大碗兒小」「ちがいがいい 八九不離十兒」のような意識がある。日本語の諺を中国のものに無理に合わせたことも誤訳の生じた原因の一つになっている。

とにかく、辞典の作者の不注意は誤訳の起こった理由であるが、この辞典が中国語特有の語句を多く取り上げたことも翻訳の間違いの原因と思われる。

終わりに

以上は、現時点でまだ世に広く知られていない『四声』を検討、分析したものである。得られた結果は以下の通りである。

第1に、『四声』は近代日本における最初の中国語辞典に位置づけられる。序論ですでに述べたように、近代日本の中国語教育は主として外交・商業・軍事といった実目的のためにおこなわれていた。その教育の場にあつては、教師も学習者も、科学的教育の必要性を自覚していなかった。『四声』は日本近代でこのような背景の平もとで作られた最初の中国語辞典である。形式も内容も整然としていないが、それは中国語研究への関心の浅さ、および試行の段階という特殊性によると考えられる。

第2は、その特別な編纂方法である。『四声』の編纂方法は、中国語を日本語へ翻訳し、その日本語が正しいかどうかを中国人の校閲を経ていないまま見出し語としたことである。この編纂方法は、明治時代の中国語辞典において、『四声』にしか採用されていない。つまり、近代日本において中国語辞典の最初の段階は翻訳であることである。また、この方法は辞典の利用価値に影響しており、編者の試行錯誤を反映するでもある。

第3に、『四声』の語彙は当時の中国人の生活と密着していた日常語を収録する方針をとっている。これは、当時、中国と中国人の生活を速かに理解することが中国語教育の目的の1つであることの表現であろう。

第4に、『四声』の言語的な価値は、北京俗語の要素が強く、現時点までに発見されていない清末北京俗語の新たな用例も収載していることである。筆者は収集し調査し、意味を明らかにしようと意図したが、一部は解明できなかった。しかし、存在したことは確実であるから、当時の北京俗語として補充できると思われる。『四声』には中国語の意味に合致しない日本語訳が多い。これは初期において日本人は中国語への理解が欠如していたからと考えられる。